



聖堂でのミサ。荘厳で静ひつな空気のなか、祈りを捧げる。一切の私語はなく、心おだやかに自己の内面を見つめる時間。この独特の「空気」と浸透した「心」は同学院ならではの。

5月22日、学院のシンボル『アンジェラスの鐘』が鳴り響く中、創立90周年を祝う記念行事が始まりました。

学院に一步足を踏み入れると、外とは空気が変わるのを感じます。全体が、独特のやさしさで包み込まれているのです。聞こえるのは、若葉のさざめき、小鳥のさえずりなどの自然の音色。ブルーの制服に映えるスタンドグラスから差し込む陽光。静けさの中にある美しさ。そのような空間で、行事は執り行われました。

記念のミサでは司教様が、「変化を恐れてはいけません。しかし同時に、自分の中に変わりぬ強い幹を持ちましょう。折れることないその幹こそ、あなた方がここで見つけるべきものなのです」と、やさしく諭されます。素晴らしいのは、その言葉を生徒たちが心から理解していること。一人の全人格的成長を願

う」という教育方針が、しっかりと浸透している証です。

ミサの後はシスター方によるパネルディスカッション、午後からは学院の小学生も交えて盛大な合唱祭が行われました。学年ごとに課題曲を歌いますが、大きな口を開けて一生けんめい歌う小学生たちに、皆が目を細めて拍手と喝采を送ります。一方で小学生は中高生たちの歌声を聴き、「いつかお姉さんたちのように」と憧れのまなざしを向けていました。

このような家族的雰囲気もまた、同学院ならではの。学院生活のあらゆる瞬間、あらゆる場所にアットホームな空気が根づいているのです。式典の終わりに柵瀬佐知子校長が述べられた言葉が、その象徴的なものでした。

「聖心は、ひとつの家庭です」。

今回の式典を支えた生徒会役員のみなさん

このような式典での企画や役割分担なども、生徒会を中心に、生徒たちが主体的に行っているそう。「90周年という記念の節目に小林聖心にいることは光栄ですし、必然だったと思う」「初代学院長の「Big You, Small I」。「謙虚」と「奉仕」を表すこの言葉こそ、私たちがずっと持ち続ける精神。小林聖心の生徒であることには、きつと意味がある」と力強く述べる。これだけしっかりしたことが言えるのも、いかに生徒たちが母校を愛し、心が磨かれているかの証。



「学院のどこが好き？」とたずねると「行事を生徒主体で運営できるところです」「小中高までみんなつながりが強くて、家族みたい」「祈りの時間が自分を見つめる機会になっていて、信仰のあるなしに関係なく、みんながその時間を大切にできているんです」と誇らしそうに話してくれました。

- 1 大成功に終わった合唱祭のようす。90周年を記念して行われた初の試みだったが、生徒たちは大いに楽しんだようだ。練習を重ねた歌声には、先生方も「すごい!」と拍手喝采。
- 2 創立者、聖マグダレナ・ソフィ・バラの肖像に感謝の祈りを。5月25日、彼女が帰天したこの日を『聖マグダレナ・ソフィアの祝日』とし、毎年、聖心女子学院の子どもたちが祈りを捧げている。今回の記念行事もそれに即したものだ。
- 3 「違いを越えて互いを大切に、一つになること。そのためにここで学ぶのです。90周年を機に、もう一度その意味を噛み砕いてください」と語る司教様。その心は、次の節目となる100周年に向けて紡がれていくはず。
- 4 純白のガウンに身を包んだ聖歌隊。『グリークラブ』の生徒たちで構成されているだけあり、その歌声は格段に美しい。

小林聖心女子学院 創立90周年記念  
『聖マグダレナ・ソフィアの祝日』

「聖心はひとつの家庭」——  
共に祈り、歌い、語り合い“家族の絆”強まる一日



ミサでは、折にふれ聖歌が捧げられる。700名を超える中高生が奏でる美しいハーモニーが、聖堂を、学院を、学院のある丘を包み込む。心洗うようなその歌声は、神々しさすら感じるほど。



普段は年頃の女の子らしくおしゃべりに花が咲く生徒たちだが、ミサでは気持ちをしっかりと切り替えて静まりかえる。この凛とした姿勢は、代々受け継がれてきた学院の校風。



聖心(みこころ)の子どもとして“物惜しみしない心”を——創立者、マグダレナ・ソフィ・バラが綴った『聖心の生徒に宛てた手紙』の朗読。利他のよるこびを伝える言葉であり、これこそ今も息づく聖心生のアイデンティティーだ。

# シスターとして、先輩として、家族として 今を生きるあなたたちに伝えたい

今回の行事で生徒たちが楽しみにしていた企画の一つが、このパネルディスカッション。それもそのはず、パネラーを務める3名のシスターたちは同学院の卒業生、つまり先輩でもあるからです。かつての学校の様すや、当時思っていたこと……同じ女性として、小林聖心生として、シスターたちがどのような青春を過ごしたのか、興味津々に聴き入っていました。



「私のころは部活というのがなかったの。生徒がそれぞれ『今日、バスケして帰らない?』とか、そういう感じでしたね」  
(シスター林)

## シスタープロフィール

- シスター林千鶴**  
上品で落ち着いたあるたがずまい、語る言葉の全てからやさしさがあふれる。自分にとっての小林聖心は「帰ってこれる場所」。
- シスター亀岡厚子**  
元気で明るい性格が魅力。学生時代もかなり活発で、お喋りも大好きだったそう。自分にとっての小林聖心は「心のふるさと」。
- シスター山谷恭代**  
学生時代は大人しいタイプだったが、そんな自分でも居場所がある聖心が大好きだった。自分にとっての小林聖心は「第二の家族」。



## 紡いできた小林聖心の魂 みなさんが 次代へつなげて欲しい

もちろん笑い話ばかりでなく、小林聖心だからこそ身についたものもたくさんあります。シスター山谷は、学校行事の劇で創立者のソフィア・バラを演じたことがあるそうで、その時の台詞「私はただ一人の子どものためにも、この学校を創立したでしょう」という言葉が、今でも胸に残っていると語ります。この「人」のために自分の力を使うことを惜しまな

「い」という価値観は、小林聖心の90年を含め、聖心女子学院200年の歴史に深く刻み込まれたDNAなのだそう。また、「目に見えないものに心を向ける」ことも学んだと言います。これこそ、学院が脈々と受け継いできた心であり、現在の生徒たちが次代へと紡いでほしいものだと訴えかけました。生徒が「自己の内面を見つめるようになる」という校風は、小林聖心の最大の特長なのです。シスター亀岡は、「小林聖心で学ぶことの中には、今すぐその価値に気づけないものもあります。しかし、人生を歩むうちに必ずわかる時がきます」と

と諭すように語ります。これはシスターだけでなく、多くの卒業生たちも異口同音に言っていること。今はピンときていない様子の生徒たちにも、きっとわかる日が来ることでしょう。質疑応答では、生徒たちから積極的に質問が飛び出します。「部活動はどんなことを?」との質問には、こんな答えが。「私のころは部活というのがなかったの。生徒がそれぞれ『今日、バスケして帰らない?』とか、そういう感じでしたね」  
(シスター林)

「はじめのついた態度、意志の強さ、忍耐力。今日も、みなさんが記念行事の合間に静かに待っている姿を見て、思わずウルツときました」  
(シスター亀岡)

と、後輩たちへの思いをうれしそうに語ります。シスターと生徒たちが互いのことをどれだけ愛し、敬っているか、よくわかるシーンでした。そしてその結びつきこそ、小林聖心が小林聖心たるゆえん。学院の絆と生徒たちの愛校心がますます深まる、素晴らしい一日となりました。



「私たちもみなさんと変わらないひとりの中高生だった」

まず話題に上がったのは、シスターたちが通っていたころの学院のようす。3人とも、なつかしように思い出を語ります。最年長のシスター林千鶴は「戦時中でしたからね。運動場に防空壕も掘られていましたよ」と語り、シスター亀岡厚子も「ロザリオヒル(ホール)や宿泊機能を有す

る、学院の研修施設)ができる前、あそこでブタやヤギを飼育していたのよ」。生徒たちも目を丸くして驚いています。

今はなき寄宿舎での生活を語ったのはシスター山谷恭代。「小1から高3までが縦割りだね。みんなが食堂に会して食事をして。楽しかったです」

一方で、修道院と同じ厳しい決まりの中で生活していたことも教えてくれました。15分で入浴を済ませるというルールには、生徒たちも「信じられない」といった表情です。

さらに、当時の習慣で、先生が木札を「カチカチ」とカスターネットのように鳴らすのが行動の合図になっていたとのこと。たとえば教室移動をする合図で「カチカチ」、「お喋りをやめなさい」という時も「カチカチ」、「静かに!」と口にせずとも、これで生徒は静まり返ったそうです。今でも生徒たちは、おしゃべりしてよい時とそうでない時の切り替えが見事に徹底されています。「自分たちの習慣のルーツはここにあったのか」と、シスターのお話にのめり込む生徒たち。なおこの木札は、学院の歴史を展示する「アーカイ

ブ」の部屋で現在も見ることが出来ます。また、シスターといえども、当時は年頃の女の子。遊ぶことだって大好きですし、つい羽目を外すこともあったそうです。「階段を一段飛ばしで駆け上がったら、外国人シスターがすごい形相で仁王立ちして待ち構えていたんです。そして一言、『Go back(やり直し!)』って」と笑うシスター林。また、ていねいな日本語を使う風習が強かったことをふまえ、シスター亀岡もこんなエピソードを明かしてくれました。

「先生の口ぐせを真似して、何かにつけて『ごめんあそばせ』って。テニスをしている時でさえそう言っていました」

という告白に、生徒たちからドツと笑い声が上がります。そんな人間的な一面を見せてくれるところも、同学院らしい温かさ。家族のような強い結束がある。それが大きな魅力なのです。

